OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	波々伯部金洲の画業 : 明治後半期の石版画とその周辺
Author(s)	藏田, 愛子
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2026, 59, p. 1-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104551
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

波々伯部金洲の画業
――明治後半期の石版画とその周辺――

藏田　愛子

キーワード：波々伯部金洲／石版画／絹絵肖像／受注記録

はじめに

本論は明治後半期から大正期にかけて、洋画、石版画、日本画、ポスターの各分野に関わりながら、主に石版画家やポスター画家として活動した波々伯部金洲（一八六二～一九三〇、名は捨四郎）の画業を明らかにしようとするものである。金洲は明治三十年代後半から大正期に三間印刷所の専属画家として、三越呉服店や大日本麦酒株式会社等の美人画ポスター用原画を手がけたことが知られる。精緻な多色石版刷りのポスターを世に送り出した三間印刷所については岩切信一郎（二〇〇〇）[1]や中谷哲二（二〇〇九）[2]、藤田麻希（二〇一一）[3]の論考がある。華やかな衣装や装身具を着けた女性を主題とする「美人画ポスター」については田島奈都子（二〇一九）[4]、二〇二三[5]、二〇二四[6]、二〇二四他[7]）や印刷博物館（二〇〇七）[8]の先行研究が詳しい。明治期の石版画史については、島屋政一（一九三九）[9]を

はじめ、小野忠重（一九七八他）[10]、町田市立国際版画美術館が開催した展覧会「「版画・八〇年の軌跡」展――明治初年から昭和二〇年まで」の図録（一九九六）[11]および美術講座論文集『近代日本版画の諸相』（一九九八）[12]、展覧会図録「描かれた明治ニッポン～石版画〔リトグラフ〕の時代～」（二〇〇二）[13]、森登（二〇一四）[14]、銅版石版印刷会社・玄々堂の亀井至一や亀井竹二郎を近年詳しく論じた郡山市立美術館（二〇二二）[15]等をあげることができる。福井藩出身の金洲による福井藩主や藩士の肖像画については福井県立美術館（一九九七）[16]が参考となる。

本論は、上記の豊富な先行研究を参照しながら、金洲遺族所蔵の新出資料（以下、金洲資料）の紹介[17]、とくに金洲が書き記した受注記録や日記の解読を中心に据え、明治二十、三十年代における石版印刷会社と金洲の関わりや金洲作品の傾向を検討する。金洲資料には肉筆の肖像画、下図類、ポスター、ポスター用原画〔図1〕、写真アルバム、文書、スケッチブック、絵葉書等が含まれており、それらは明治大正期の石版画やポスター、貴顕人や女性の肖像画等の制作背景を考える上での貴重な資料と言える。本論はこの金洲資料を手がかりに、明治後半期に石版印刷会社からの請負仕事で生計を立てた金洲の活動実態を追うとともに、明治三十年代後半以降、金洲が石版画の仕事で培った写実的な肖像画の描法を生かした日本画作品を発表し、美人画ポスターの名手としての立場を確立していく様子を明らかにしようとするものである。



図1　ポスター用原画
個人所蔵



図2　肖像写真　個人所蔵



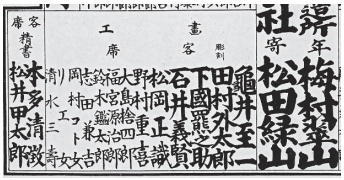


図3　＊禁転載
「石版技手人名鏡」
国文学研究資料館所蔵

一　波々伯部金洲について

まずは先行研究や金洲資料、金洲遺族からの情報提供をもとに、金洲の略歴を述べることにしたい。その生涯については、金洲の絶筆となった《楊柳観世音尊像》（一九三〇年、絹本着色、観音寺所蔵）の原色版縮小複製に添えられた堀江健太郎の文章（一九三〇）[18]が詳しい。島屋政一は『日本版画変遷史』（一九三九）[19]の中で「堀江氏執筆観音像の引」とし、彫刻石版や砂目石版の名工金子政次郎とともに、砂目石版や肖像画に秀でた金洲を「伯爵伊藤博文君肖像」の挿図を添えて紹介している。以下に金洲の略歴をまとめる。

波々伯部金洲〔図2〕は文久二年（一八六二）五月十二日に福井藩士波々伯部繁辰の次男に生まれた。名を捨四郎といい、号に繁、金洲がある。波々伯部姓[20]のほか、一八八二年（明治十五）頃まで奥村姓を、一八八三年（明治十六）から一八八五年（明治十八）頃には大島姓を名乗った。一八七七年（明治十）に十六歳で上京し、宮本三平に師事して洋画を学んだ。宮本の営んだ三平堂は石版印刷、画手本、地図、酒や缶詰の飾紙等を幅広く取り扱い、画学の指導も行った[21]。宮本の門下生には金洲のほか、渡部鍬太郎[22]、溝口耕一、塩谷謙、太田七郎、海野融、井汲陸二郎らがいた。彼らの中には三平堂を経て、学校の図画教員、

大学勤務の画工に就いた者がおり、[23] 金洲は石版画工の道に進んだ。明治十年代後半の有力な石版印刷従事者を番付した『石版技手人名鏡』〔図3〕の[24]「画工」欄には、玄々堂の亀井至一や野村重喜に並んで金洲の名前「大島捨四郎」が記されている。一八八五年（明治十八）頃の石版印刷界において、金洲が石版画工としてある程度知られていたことの証左と言える。明治十年代後半から三十年代の長きにわたり、金洲は印刷会社や個人からの仕事を請け、絹絵、額絵、広告、新聞や小説の挿絵等を数多く描いた。

一八八九年（明治二十二）に洋画家団体の明治美術会が結成されると、金洲は通常会員として同会に参画した。金洲資料には「第壹壹号　波々伯部捨四郎殿」と書き込まれた会員証〔図4〕が残されている。一八九五年（明治二十八）の第七回明治美術会展には石版の肖像画を出品した。[25] 同年、明治美術会の通常会員有志は、同会第三代会頭の花房義質に画帖『小宴紀念』（岐阜県美術館所蔵）を贈呈しており、[26] そこに金洲は石版画「伯爵伊藤博文君肖像」（香山秀吉印刷）〔図5〕を寄せている。肖像画の像主は日清講話条約の全権大使を務めた伊藤博文とし、金洲はその額や頬に微妙な陰影をつけ、礼服の濃い色合いを砂目の濃淡を巧みに調整して表現している。洋画を学び、砂目石版画の描写を得意としていた様子が窺える。なお、金洲は明治美術会のほか、トモエ会、[27] 日月会、日本図案会[28]にも加わった。一九〇二年（明治三十五）の第十三回日本絵画協会展に《眞の和楽》、一九〇四年（明治三十七）のセントルイス万国博覧会に《美人》を出品するなど、美術展覧会に



図4　明治美術会会員証
個人所蔵

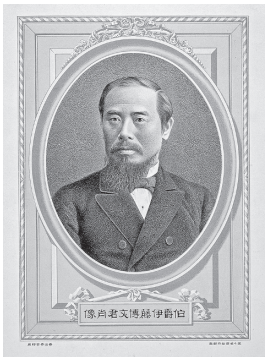


図5　「伯爵伊藤博文君肖像」
岐阜県美術館所蔵

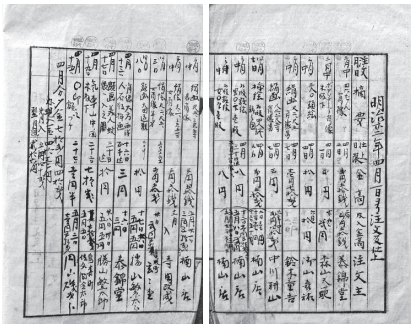


図6　「文書1」　個人所蔵

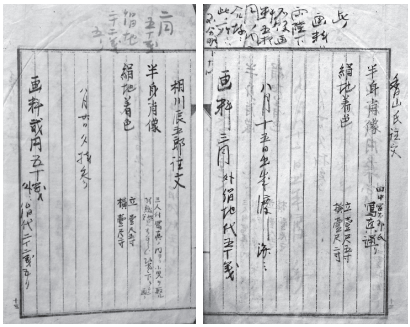


図7　「文書2前半」　個人所蔵

も積極的に出品した。一九一一年（明治四十四）の三越呉服店第一回広告画図案懸賞募集に出した《当世美人》は三等賞を受賞、三間印刷所の専属画家として同所の美人画ポスターを数多く手がけた。一九二三年（大正十二）九月の関東大震災の後、阪神間に移り住み、晩年は観音図や龍図の大作、乃木希典や東郷平八郎の肖像画制作に取り組んだ。一九三〇年（昭和五）十一月五日、兵庫県武庫郡大社村（現在の兵庫県西宮市）に没した。享年六十九。

二　明治二十年代 ―石版画工と画家の狭間

以上の経歴を踏まえ、つぎに明治二十年代の具体的な活動を明らかにするため、金洲資料の文書〔表1〕中の「文書1」〔図6・表2〕と「文書2前半」〔図7・表3〕を検討する。金洲が複数の石版印刷業者からの依頼を受け、石版額絵、絹画（肉筆の肖像画）、新聞附録、小説挿図等を幅広く描いた様子をみていくことにしたい。

「文書1」〔図6・表2〕は「注文受簿」の表題をもつ。文書の作成時期は書き込まれた年月日に基づき一八八九年（明治二十二）四月一日より一八九〇年（明治二十三）四月、一八九二年（明治二十五）十二月中旬より一八九三年（明治二十六）二月と推定できる。「注文月日」「摘要」「仕上日限」「金高」「内入金高」

「注文主」の項目が設けられ、そこに注文日、依頼内容（画題、技法、寸法等）、仕上げまでの日数、画料、注文主、月ごとの総収入額等が記されている。

「文書2」〔図7・図14・表3・資料1〕は表紙を欠き、全二十二丁を綴った文書である。前半七丁は箇条書きの受注記録の形式で、後半十五丁は日ごとの行動を記した日記の形式である。前半と後半で大きく書式が異なるため、ある段階で金洲または息子の波々伯部方次[29]が前半と後半を一つに綴じた可能性が考えられる。

受注記録の性格をもつ「文書2前半」〔図7・表3〕の作成年は不明で、八月から十月までの月が記される。この中に築地活版製造所を注文主とし「九月中旬より取掛り十月二日出来」の日程で「故社長曲田成君石版」を作成したとの記述がみられる。築地活版製造所の二代社長であった曲田成[30]が一八九四年（明治二十七）十月十五日に急逝したことを踏まえると、「文書2前半」はそれ以降の一八九五年（明治二十八）八月から同年十月にかけての文書であると推定できる。

以上の「文書1」〔図6・表2〕と「文書2前半」〔図7・表3〕の内容をもとに、依頼内容や注文主をみていくことにしたい。摘要欄には「絹画」「絹絵」「絹地肖像」「額画」「額絵」「肖像石版」「挿画」「新聞附録」「小説挿画」といった書き込みが散見される。「額画」や「額絵」は明治初頭に流行しはじめた一枚刷りの石版額絵を指すと考えられる。石版額絵は明治二十年代半ばには人気を失ったとされるもので、石版額絵の凋落に呼応するかのように、金洲への「額画」や「額絵」の注文は一八九二年（明治二十五）年以降減っていく傾向を読み取ることができる。

画題は人物の全身や半身を描いた肖像画が大半を占める。女性、男性、老人、「雪降芸妓」といったものから、太田道灌、「楠公」「水戸黄門公」、香川景樹等の歴史上の人物、板垣退助、加藤弘之、勝海舟、中根雪江等の特定の人物を対象とした肖像画等である。

注文主の欄には、泰錦堂、楠山店（楠山秀太郎）、玄々堂、勝山繁太郎、御山喜助、桐原捨三、香山秀吉、渡辺忠久、森田政武、美術屋、三益社、厚盛堂、国文社、三間印刷所等の石版印刷業を営んだ会社や個人の名前が並ぶ。国文社、香山秀吉、楠山秀太郎、森田政武、御山喜助は一八八五年（明治十八）の『石版技手人名鏡』〔図3〕にも名前がみえ、当時の主要な印刷会社から金洲に仕事の依頼が舞い込んでいたと考えられる。

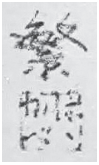
比較的割高な画料報酬の仕事としては、桐原捨三を注文主とした「米国議事場之図 新聞附録」（二十五円）、「皇族大臣 大画」（三十五円）、「改進新聞 看板」（二十五円）をあげることができる。桐原捨三は[31]東京市や東京府の議員を務め、改進新聞三益社主幹や国文社社長等を務めた有力者であった。金洲にしてみれば、桐原捨三からの依頼は実入りの良い画料を期待できたと思われる。

その他の注文主には、美術着色会社を営み、美人画や名所絵等の石版画の代表的な発行者であった勝山繁太郎[32]の名前が度々登場する。勝山と金洲が組んだ石版画集の一つに『当世十二ヶ月』がある。印刷画作兼発行人を勝山繁太郎、美術着色会社が製造、金洲（当時の号は「繁」）が石画を担当している。『当世十二ヶ月』には「遣り羽子」「臥龍梅」「津美草」「はな見」「亀井戸の藤」「梅雨の曲」「墨田川の涼」「大磯の海水」「秋の七草」「園の菊」「瀧野川紅葉」「墨堤の雪」の画題ごとに、季節を感じさせる十二の場面が表された。各図の画面隅には「はゝかべ」や「繁」のサインがあり、六月の「梅雨の曲」〔図8〕には「繁」と「はゝかべ」の二つが付されている。

「文書1」〔図6・表2〕からは、郷里福井藩の人脈による絹絵肖像の仕



図8
「六月 梅雨の曲」
国立国会図書館所蔵



部分（左下）

事があったこともわかる。一八九〇年（明治二十三）一月に「矢野」を注文主として「中根雪湖先生　漁夫姿全身」の制作依頼を受けたとの記述が出てくる。これは、福井市立郷土歴史博物館学芸員の藤原千穂氏の教示により、福井藩士の矢野虎太が金洲に注文した《中根雪江像》であると考えられる。越葵文庫所蔵（福井市立郷土歴史博物館保管）の波々伯部繁筆《中根雪江像》〔図9〕は[33]「明治庚寅紀元節」の年紀（明治二十三年二月十一日）をもち、賛は冨田敦積（鴎波）、賛の筆は荻野明雄による。像主の中根雪江（靱負）は[34]福井藩主松平春嶽に仕えた福井藩士で、「松蔭漁翁」と名乗り釣りを好んだ。箱書きに「矢野虎太呈上」とある点、越前松平家に伝来した資料群（越葵文庫）に含まれている点から、同作は矢野虎太から越前松平家に献上されたと考えられる。

中根雪江の漁夫姿を描いた絵画としては、洋画家亀井竹二郎が、明治二年（一八六九）の中根雪江の肖像写真〔図10〕をもとに描いた《中根雪江像》（一八七七年、油彩、越葵文庫所蔵）が先行作例とされる[35]。金洲はそれから十年以上経った一八九〇年（明治二十三）に、中根雪江の肖像写真〔図10〕を参照しながら《中根雪江像》〔図9〕を描いたことになる。金洲筆《中根雪江像》では、顔貌は肖像写真に忠実に描いているように見えるものの、竿を持つ手、足の開き具合、足もとの影等、肖像写真から変更している点も見出せる。顔かたちや表情、顔の陰影は写真をそのまま写し取ろうとしているが、顔以外の着衣や小物、手足の位置には、金洲による変更が随所に加えられていると



図9
《中根雪江漁夫像》
越葵文庫所蔵



図10
中根雪江肖像写真
福井市立郷土歴史博物館所蔵

みることができる。

大日本帝国憲法が発布され、帝国議会が開設された明治二十年代前半、小新聞社が絵入新聞を刊行、新聞附録を出す新聞社も数を増やしていった。[36] そうした向きに連動するように、「文書1」〔図6・表2〕には「新聞附録鍋嶋公外四人付」や「毎日新聞附録 明宮殿下御肖像」の記載がみえ、金洲が新聞附録の制作を引き受けていたことがわかる。

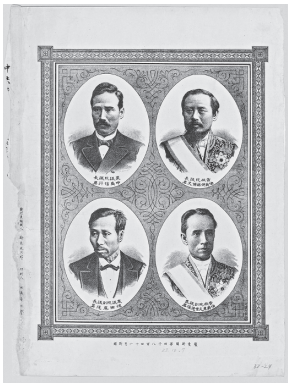


図11
「貴衆両院正副議長肖像」
明治新聞雑誌文庫所蔵



図12
「美人・才芸優等者」
明治新聞雑誌文庫所蔵

『読売新聞』の附録「貴衆両院正副議長肖像」〔図11〕は、貴族院議長の伊藤博文（右上）、貴族院副議長の東久世通禧（右下）、衆議院議長の中島信行（左上）、衆議院副議長の津田真道（左下）の各半身肖像を配した一枚物の新聞附録である。額縁風の枠の右下隅に小さく「波々伯部繁」の書き込みがあり、金洲の手になる石版画であることを示している。四人の肖像はいずれも写真をもとに描いたと思われる。右上の「貴族院議長 伯爵伊藤博文君」は、明治美術会通常会員画帖『小宴紀念』の「伯爵伊藤博文君肖像」〔図4〕とくらべると、髪型や前髪のうねり具合、顔の向きや影の入り方に類似点が多く見いだせることから、両者は同じ写真をもとに描いた可能性が考えられる。ただし、両者は全く同じというわけではないようだ。右上の「貴族院議長 伯爵伊藤博文君」や右下の「貴族院副議長 伯爵東久世通禧君」は皇族・華族・勅選議員等で構成される貴族院の議長や副議長で

あることを示すように大綬や勲章をつけた礼服姿で描かれている。選挙で選ばれた議員で構成される衆議院の議長・副議長（左側の上・下）と貴族員議員の違いが服装によって明示されている。像主の顔貌は写真をもとに表現しつつ、各々の地位を明確に示すために服装に変更を加えて描いた可能性が考えられる。

こうした議員肖像だけでなく、この時期の小新聞社の新聞附録には、当時流通していた芸妓写真を写し描いたと思われる肖像画がある。一八九三年（明治二十六）八月一日の『改進新聞』（第三一四八号）の附録には、右下に「波々伯部繁画」のサインをもつ「美人・才芸優等者」〔図12〕が載っている。『改進新聞』は改進党機関誌の一つであり、東京京橋区の三益社を発行所とし、絵入りの小型の新聞（小新聞）を出していた。男性読者の購読を期待するかのように、三枚の芸妓ブロマイド写真を並べたような構図をとっている。中央枠に「才芸 優等 津ノ国屋 あつま」、右上枠に「美人 優等 新中村 千代」、左下枠に「才芸 次点 古川屋 大福」の書き込みがみえ、当時の人気芸妓写真を石版刷りの新聞附録にする趣向であったと考えられる。

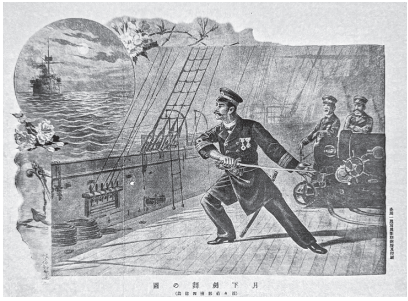


図13
「月下剣舞の図」国立国会図書館所蔵

一八九四年（明治二十七）に勃発した日清戦争の様子は、新聞や雑誌を通じて絵入りで様々に報じられた。「文書2前半」〔表3〕には、日清戦争関連の作画依頼を受けたと思われるものがある。一八九五年（明治二十八）八月には博文館からの依頼で「写真銅版下絵 軍艦中ニテ月夜剣舞ノ図」を制作している。これは『少年世界』（第一巻第一六号）に載る口絵「月下剣舞の図」〔図13〕を指すのだろう。同号には日清戦争を主題にした柳井絅齋の漢詩が載っている。金洲は漢詩に呼応するように、中央の人物の足下に長くのびる影を描くこと

で、月下に舞う人物であることを表している。また、甲板で剣を手に舞う人物の顔貌を明瞭に描くことで、その人物が、西京丸で黄海海戦に会した海軍軍令部長の樺山資紀であることを伝えている。博文館で雑誌編集に携わった木村小舟は、のちに『少年世界』を振り返り、[37]「月下剣舞の図」が「黄海々戦後の樺山提督の剛壮の状を取扱へる」ものであると述べ、『少年世界』誌上で好評を博した人気の口絵であったとしている。実在の人物の顔貌を明瞭に表現し、かつ服装や小物等の細部を緻密に描くことで、描いた内容がより現実味を帯びるよう工夫しているようにみえる。

明治十年代から明治二十年代半ばは浮世絵版画に替わって一枚刷り石版画が全盛を迎え、名所や歴史上の場面、貴顕人や美人の肖像等を表した一枚刷り石版画が数多く制作された時期とされる。[38]一八八五年（明治十八）の『石版技手人名鏡』に並ぶ石版印刷従事者数の多さは、当時の石版印刷界の活況を伝えている。しかし、明治二十年代後半には、写真石版やコロタイプ版の登場も重なり、一枚刷り石版画の人気は急速に失速していった。石版画の隆盛に陰りが差し始める一八八九年（明治二十二）から一八九三年（明治二十六）頃にかけて、金洲は砂目石版画の仕事を中心に、歴史上、政治上の特定の人物を描いた絹画の注文も請けていた様子が窺える。明治二十年代半ばに石版額絵の注文がしだいに減っていく中にあって、画料の多寡に拠らず様々な仕事の依頼を受けていたと言えるだろう。

三　明治三十年代から大正期 ― 肖像画から美人画ポスターへ

続いて、明治三十年代前半の金洲の仕事を垣間見る資料として、金洲資料の文書〔表1〕中の「文書2後半」〔図14・資料1〕と「文書3」〔図15・表4〕を検討する。「文書2前半」が受注記録としての性格をもつのに対し、「文書2後半」は日々の仕事や訪問先、面会者などを記した日記と言える。

「文書2後半」〔図14・資料1〕は作成年が記されていないものの、十一月二十日の「三間へ竹山死去に付悔に行く」との記述は、作成時期を絞り込む手がかりとなる。「竹山」とは慶雲堂三間印刷所（のち三間印刷所）創業者三間七兵衛のことであろう。[39] 竹山が一八九九年（明治三十二）十一月に没したことに鑑み、「文書2後半」は一八九九年（明治三十二）十月から十二月の三ヶ月間に記された日記と推定する。

「文書3」〔図15・表4〕は表紙を欠き、全十二丁が綴られている。「三十三年一月分収入金」の見出しにより一九〇〇年（明治三十三）一月から五月までの受注記録と考えられる。以上の「文書2後半」〔図14・資料1〕と「文書3」〔図15・表4〕より、金洲が明治三十年代前半頃においても石版印刷業界の人々と交流を重ね、依頼された仕事に精力的に取り組んでいた様子を見ていくことにしたい。

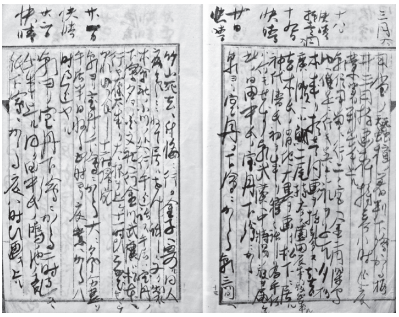


図14 「文書2（後半）」 個人所蔵

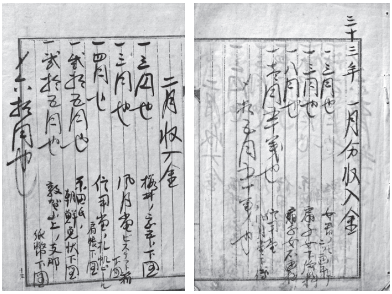


図15 「文書3」 個人所蔵

一八九九年（明治三十二）十月上旬に金洲が引き請けた仕事を抜き出してみる。一日から六日に「ルイスビル」の包紙の下絵と石版、二日から六日に勤め先である国文社の仕事として「山陽堂のヘーパ」、八日から十四日にかけて国文社での「茶の絵」の下絵と石画、九日から十一日に「火災保険の暦及び案内」の下絵と続く。ほぼ休みなく作画依頼を受けていたようだ。勤め先である国文社の仕事だけでなく、個人的に依頼を受け、自身で完成品を注文主に届

け画料を受け取ったり、絵を描いた石を届けに出向いたりしている。

一八九九年（明治三十二）十月から一九〇〇年（明治三十三）五月にかけての注文主には、国文社[40]、大盛社、信陽堂[41]、東陽堂等の印刷会社、上原、桜井（信陽堂）、武廣（国文社）、田中、吉木（国文社）、勝山、平田、小川、栗山、貫井（東陽堂）、吉本等の個人が登場する。明治二十年代前半頃の注文主とは顔ぶれが変わり、国文社や信陽堂が主な注文主であったと考えられる。この時期の金洲は、東京の石版印刷会社として知られていた国文社との繋がりが強かったようだ。「文書2後半」〔図14・資料1〕によると、一八九九年（明治三十二）十月二日に国文社の社員三十名によって、金洲を含む三名の送別会が開催されている。この時期に金洲は国文社を退社したのだろう。

金洲資料には金洲と国文社との関係を示す石版下絵が残されている〔図16〕。描いた場所を特定できないものの、同画には石垣、建物、松や桜が植えられた敷地、馬や人力車を停めて階段を昇降する人々、建物の背後に広がる山々や水辺が丹念に描かれており、海か湖近くの名所や寺院等を描いた可能性が考えられる。枠線の左横隅に「国文社技手波々伯部繁画〔はゝかべ印〕」と書き込まれている。金洲が国文社技手として勤務した頃の作とみることができる。

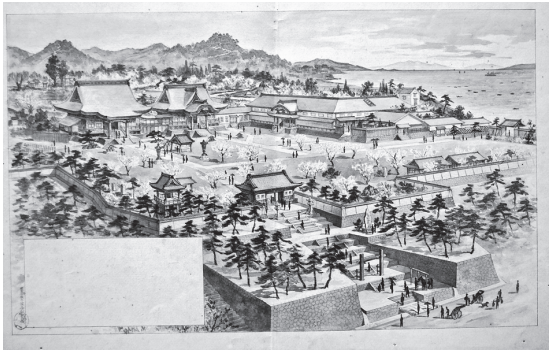


図16　石版下絵　個人所蔵



部分（左下）

一八九九年（明治三十二）十月二十一日の日記には、本の表紙を頼まれるも断ったとの記述がみられる。作画依頼

を引き受けるか否かを金洲自身が判断する様子が窺える。広告や看板の下絵、石版画、肖像画等各種の仕事を請けつつも、自身の判断で仕事を選んでいく姿勢とみることもできるだろう。

ここからは「文書2後半」と「文書3」の検討を離れ、明治三十年代以降の展覧会出品に目を向ける。明治十年代後半から二十年代における金洲の主な仕事は、石版印刷業者を注文主とする下絵や肖像の制作にあったと言えるが、画業の後半に差しかかる明治三十年代後半頃には、次の美術展覧会や万国博覧会への絵画出品の動きがみられる。

・一九〇二年　第十三回日本絵画協会秋季展に《眞の和楽》を出品
・一九〇三年　日月会展に《剛柔》を出品　印度王族買上げ[42]
・一九〇四年　セントルイス万国博覧会に《美人》を出品
・一九〇五年　日月会展に《淑女》を出品
・一九〇六年　歴史風俗画会に《おこしょう》を出品　銅賞受賞

一九〇二年（明治三十五）の第十三回日本絵画協会秋季展に出品した《眞の和楽》〔図17〕には、木陰に腰掛けた男性と乳飲み子を抱く女性の光景が描かれている。[43] それ以降の展覧会出品作が女性単独の立ち姿を描いた作品が占



図17《眞の和楽》



図18《美人》



図19《淑女》



図20 下絵
個人所蔵



図21《おこしょう》
写真　個人所蔵

めていく中、樹木を背景に複数の人物を配した構図はやや趣を異にしている。[44]

一九〇四年（明治三十七）のセントルイス万国博覧会に際して、金洲は「日本画之部」に《美人》〔図18〕[45]を出品した。同博覧会の日本美術出品報告書『聖路易博覧会出品日本美術』[46]には、金洲の作品が日本語で「美人額」、英語では「Fashionable lady of Fifty years ago」と記されている。英語の作品名に「五十年前の」とあるように、本作には武家の女性を想起させるような、着物姿の女性が傘を手に持って佇む姿が表されている。着物や髷、簪等の衣装や小物は江戸時代の歴史風俗を思わせる一方、女性の顔立ちはどこか写真をもとに描いたかのような現実味を帯びている。当時の博覧会出品評には「波々伯部金洲の美人は写真に色を付けた様な写実の手際、見事ではあるが是日本画か西洋画か問題なるべし」[47]との評が載った。この絵画評が指摘した、とくに顔貌の表現における「写真に色を付けた様な写実の手際」の傾向は、明治三十年代後半以降の金洲の描く女性像の特徴を言い得ている。

武家の女性をまるで写真で撮ったかのように表す描き方は、一九〇五年（明治三十八）の日月会展に出品した《淑女》〔図19〕[48]、一九〇六年（明治三十九）の歴史風俗画会に出品した《おこしょう》〔図21〕[49]にも見

ることができる。《淑女》〔図19〕には、武家の出を思わせる年若い女性が狆を抱いて立つ姿が描かれた。白色と黒色の毛で覆われ、大きな顔や目を特徴とする狆は犬の一種で、猫のように座敷で飼われてきた愛玩動物である。[50] 狆を主要なモチーフに据えることで、そこに描かれている女性が江戸時代の大奥や武家に暮らす身分の高い女性であることを示そうとしたと考えられる。なお、金洲資料には狆を単独で描いた下絵〔図20〕も残されている。この下絵には水玉模様の涎掛けを付けた狆の姿が描かれている。さらに《淑女》発表以前に刊行された『帝国画報』（一九〇三）[51]には、金洲筆《侍女》の作品図版が載っている。同画報の作品図版の解説文中に「御殿女中の風姿」とあり、大奥の侍女の足元には涎掛けを付けて戯れる狆が描かれている。

こうした明治三十年代後半の金洲の展覧会出品作に共通する点として、一つには石版画から日本画へと表現媒体の幅を広げようとした点、もう一つには「江戸」の女性という過去の歴史風俗を画題とした作画傾向を指摘することができる。石版画から日本画への移行は金洲に限ったことではないようだ。山口真理子（二〇一〇）[52]は、一八七七年（明治十）に日本初の多色刷石版《玉堂富貴》を生み出した石井鼎湖が石版印刷に貢献したのち、明治二十年代には日本画や歴史画の発表へと向かったと指摘する。鼎湖と金洲の二人をすぐさま比較はできないものの、金洲が日本画の部門に作品を発表していく意識の変化については、今後の検討課題としたい。さらに、村瀬可奈（二〇二三）[53]は、楊洲周延の浮世絵を考察対象に明治時代における「江戸」の絵画化を明快に論じている。明治二十年代に大奥や武家の女性や風俗を描いた絵画が流行し、明治三十年代にも依然として江戸回帰と言えるような懐古趣味的な傾向が指摘されている。明治三十年代後半の金洲作品にみられ



図22《当世美人》　個人所蔵

る江戸時代の大奥または武家に属する女性を描いた諸作品についても、さらなる検討が必要であるだろう。

一九〇五年（明治三十八）の三越呉服店秋用ポスター《三越呉服店 元禄模様宣伝時代》は、金洲の手になる日本画を三間印刷所が菊全判の大きさに二十刷りで仕上げた大作で、当時大きな話題を呼んだ。[54] 一九一一年（明治四十四）には三越呉服店が第一回広告画図案懸賞募集を行い、[55] 三間印刷所図案部が出した金洲筆《当世美人》は三等賞（日本画、賞金百円）に選ばれた〔図22〕。なお、第一等賞は橋口五葉《此美人》（西洋画、賞金千円）、第二等賞は山田秋畝《元禄美人》（日本画絹本、賞金二百円）であった。当時、三越呉服店のポスター印刷を専有していた三間印刷所は、《元禄模様宣伝時代》や《当世美人》といった金洲の手になる美人画のポスター印刷で好評を博し、さらには二代社長三間隆次の手腕によって、南満州鉄道株式会社、アサヒビール、明治屋、日本郵船株式会社、カブトビール、桜正宗等のポスターも幅広く手がけるようになっていった。

金洲資料の写真アルバムの一枚に、三間隆次が麦酒広告ポスター（またはポスター用原画）を手にして写る写真〔図23〕が残されている。写真に写るポスターは、一九一〇年（明治四十三）に金洲が手がけた大日本麦酒ポスター〔図24〕によく似ている。写真〔図23〕とポスター〔図24〕では手前に並ぶ麦酒の配置や数、女性が手にもつリボン



図23　写真　個人所蔵



図24　大日本麦酒
ポスター 函館市中央図書館所蔵



図25　下絵　個人所蔵

の形等、細部に違いは見られるものの、おそらくこの写真は三間印刷所が大日本麦酒ポスターを印刷した時期に撮影されたのだろう。金洲資料には大日本麦酒ポスターの女性の頭部のみを描いた絹本断片〔図25〕も残されている。額の生え際、結った髪に入る光沢、頬や鼻筋の形が微妙な陰影を付けて描かれており、髪飾りや笄といった小物の描写からは、ポスターとして印刷される前の、金洲による緻密な描写の一端が窺える。

おわりに

ここまで金洲遺族所蔵の新出資料（金洲資料）を取り上げ、波々伯部金洲が書き記した受注記録や日記の解読を中心に、明治二十、三十年代における石版印刷会社と金洲との関わりや作品の傾向を検討してきた。明治二十年代には石版印刷業者からの請負仕事で生計を立てていたものの、明治三十年代後半以降になると、金洲が石版画の仕事で培った写実的な肖像画の描法を生かした日本画作品を発表し、三間印刷所専属の美人画ポスターの名手としての立場を確立していく様子が窺えた。金洲が描く女性の顔貌表現には、石版下絵や絹絵肖像で培った、写真をそのまま写しとったかのように見せる描き方が発揮されていた。

本論で取り上げた金洲資料は全体の一部分に過ぎず、波々伯部金洲に関する本格的な調査研究は始まったばかりと言える。金洲資料の詳細な把握や個別の作品分析、大正期以降の活動等については、今後の課題としてさらに検討していきたい。

表1　波々伯部金洲関係文書

文書件名		作成時期	丁数
文書1	注文受簿〔受注記録〕	明治22年4月－明治23年4月、明治25年12月－明治26年2月	11
文書2(前半) 文書2(後半)	〔受注記録〕 〔日記〕	明治28年8月－明治28年10月(前半7丁) 明治32年10月－明治32年12月(後半15丁)	22
文書3	〔受注記録〕	明治33年1月－明治33年5月	12
文書4	〔収入記録〕	大正3年6月－大正4年2月	17
文書5	会員諸君住所名簿并に会費収入費　金洲画会　〔熊木清吉(集金人)〕	大正8年7月－大正9年8月	8

表2　「文書1」

	書き込み	注文受日	仕上日	金額	注文主
明治22年4月	「四六ばん　肖像」	3月中	4月2日	2円50銭	泰錦堂
	「ボアソナード肖像　木版下」	3月中	4月1日	2円	森山天蔵
	「三人〇額絵」	3月中	4月4日	10円	御山喜祐
	「絹画　尺二、尺五　肖像男」	3月中	4月7日	1円70銭	鈴木重吉
	「絹画　尺二、三尺五寸　肖像男」	－	4月7日	3円	中川耕山
	「挿絵　石版　四人談話之図」	4月7日	4月9日	2円50銭	楠山店
	「石版額絵　男〇印　壱版」	3月中	4月30日	8円	楠山店
	「石版額絵　女〇印　壱版」	3月中	4月30日	8円	楠山店
	「絹画　尺五、三尺五寸　男肖像」	3月中	5月31日(画料受取)	3円50銭	楠山店
	「絹絵　尺二、三尺五寸　女肖像」	3月中	12月(画料受取)	3円50銭	寺田政成
	「絹絵 尺二、尺五　女肖像半身」	4月3日	4月12日	2円50銭	玄々堂(呉服町)
	「額画　太〔大〕田道親〔灌〕」	4月8日	4月20日	10円	勝山繁太郎
	「肖像 大方 西洋人 石版挿画」	4月13日	4月16日	3円	泰錦堂
	「額画 美人蚊帳へ入之図」	4月17日	4月30日	10円	勝山繁太郎
	「気〔汽〕車山中ノ図　木版下」	4月19日	4月22日	70銭	佐久間金太郎(烏森町)
	「〇印之額ブチ」	4月15日	4月27日	1円50銭	円山磯次郎
明治22年5月	「楠公訣別之図」	5月	5月15日	10円	小川寅松
	「絹地肖像　男全身」	5月9日	5月14日	3円50銭	楠山店
	「表紙百人一首　六人ノ者」	5月11日	5月12日	1円20銭	御山喜助
	「束はつ美人」	5月	7月16日	10円	勝山繁太郎
	「挿画 外国人肖像」	5月13日	5月15日	2円50銭	泰錦堂
	「陸軍将校方六人入額画」	5月13日	5月23日	10円	御山喜助
	「表紙一面」	5月21日	5月24日	1円	御山喜助
	「水戸黄門公肖像 石版」	5月19日	5月30日	5円	知新堂　中川
	「香川景樹 挿画 肖像石版」	5月21日	5月24日	1円50銭	楠山店
	「陸軍中　絹地　尺五に三五ノ肖像」	5月27日	6月20日頃	3円50銭	楠山店
明治22年6月	「米国議事場之図 新聞附録」	6月5日	6月30日	25円	国分〔文(以下同)〕社長　桐原捨三
	「コンテ-画　男老人肖像」	6月3日	6月15日	－	山本幸吉
	「支那ノ景 四六ば　挿画」	6月9日	6月11日	2円	楠山店
	「コンテー画　板垣伯肖像」	6月10日	6月15日	5円	板垣伯邸
	「支那本〔一字抹消〕表紙三人者」	6月14日	6月14日	1円	御山喜助
	「洋人石像ノ図 グエン、中へ」	6月14日	6月17日	1円50銭	松田彌太郎
	「坊主全身コンテー像」	6月17日	6月21日	2円50銭	楠山店
	「勅論小〇印〇ノ中へ二人」	6月25日	6月30日	4円	相澤
	「手札裏ノ肖像」	6月25日	6月30日	1円(一ツ)	堀川
	「額絵 女桜付半身道中」	6月26日	7月10日	10円	二瓶
明治22年7月	「新聞附録鍋鳰公外四人付」	7月1日	7月10日	7円50銭	泰錦堂
	「榎本子肖像　挿画」	7月1日	7月3日	2円50銭	香山秀吉
	「磐梯山ノ図　四六はん三面」	7月4日	7月	10円50銭	製紙分社
明治22年9月	「十八人附ノ〇印額画」	－	－	6円(画料)	松岡正議
	「西京美人」	－	－	10円(画料)	薬田正三郎
	「広苔〔告〕画」	－	－	7円50銭(画料)	板倉勝治
明治22年10月	「毎日新聞附録　明宮殿下御肖像」	10月27日	10月31日	14円(画料)	泰錦堂
	「伊勢大廟図」	10月28日	11月12日	10円(画料)	勝山繁太郎
明治22年11月	「額画美人掛物ヲ持チ見テ居ル図」	11月1日	11月20日	10円(画料)	渡辺忠久
	「小形 松本順公肖像」	11月9日	11月10日	1円50銭(画料)	森田正武
	「絹地半セツ 半身肖像」	11月10日	11月20日	4円(画料)	越前武生出家　満岡慈舟
	「絹地 尺二三、五　全身　女肖像」	11月13日	11月18日	2円50銭(画料)	楠山店
	「小説入之肖像二十」	11月14日	11月22日	8円(画料)	玄々堂本店
	「上野博覧会新聞　四六ばん」	11月16日	11月25日	5円	泰錦堂
	「絹画半身　男老人肖像」	7月中	11月25日	3円	田中勝典
	「小形外国人肖像」	11月28日	11月30日	2円	泰錦堂

	書き込み	注文受日	仕上日	金額	注文主
明治22年12月	「美人炬燵入」	12月1日	12月中(収入)	10円	美術屋
	「皇族大臣　大画」	12月	12月21日	35円	三益社　桐原捨三
	「小形外国人肖像　画直し」	12月	12月中(収入)	1円	泰錦堂　中村
	「後藤伯大肖像」	12月5日	12月9日	6円	冨田
	「改新新聞題字画」	12月	(出来済)	2円	三益社
	「絹画 小形　男半身」	12月	(出来済)	2円50銭	香山秀吉
	「若干□〔整か〕頓　石版　四六肖像」	12月	(出来済)	1円50銭	森田政武
	「加藤弘之肖像　石版四六」	12月	12月28日	2円	泰錦堂
明治23年1月	「小娘全身肖像絹　一、五　三、五」	1月	(収入済)	3円50銭	楠山店
	「勝伯　四六肖像　石版」	1月	2月(収入済)	1円50銭	森田政武
	「男半身　　一、五　三、五　絹画」	−	1月31日(収入)	3円50銭	寺田政奉
	「憲法発布式　大石版」	1月	1月14日・17日・31日、2月10日(収入)	50円	渡邉忠久
	「半紙半折　小説挿画」	1月19日	1月24日	2円	香山秀吉
	「改新新聞　看板」	1月	2月28日	25円(画料)	柳原捨三
	「石版　四六　肖像」	1月	(出来済)	2円	楠山店
	「女　完絵」	1月	(出来済)	4円	石坂兵蔵
	「中根雪湖先生　漁夫姿全身」	1月	(出来済)	−	矢野
明治23年2月	「男半身　小形　絹像」	2月	(出来済)	2円	相川辰五郎
	「雪降芸妓　額絵」	2月	(出来済)	10円	美術屋
	「○印男　小形」	2月	(出来済)	1円50銭	厚盛堂
明治23年3月	「絹画　小形二人付　肖像」	3月	−	3円50銭	森田政武
	「絹画　男全身　肖像」	3月	−	3円	太田
	「仏国国会儀之図」	3月	−	35円	江木
	「四季額画小形　口角付」	3月	−	18円	博文館
明治23年4月	「男肖像　尺二　絹画　三尺五寸」	4月	−	3円50銭	清水
	「四六　石版　男肖像」	4月	−	2円	泰錦堂
	「大コンテー　男半身」	4月	−	−	楠山店

明治25年12月	「菊板ボカシ　山田伯肖像　砂目画」	12月17日	12月20日	2円(画料)	香山秀吉
	「額画板閑東附録　儀〔議〕員十人付　砂目画」	12月19日	12月25日	12円(画料)	泰錦堂
	「伝聞社図朝作本表紙下絵」	12月20日	12月28日	−	国分社
	「福井ニて画キシ良顕君肖像持参」	12月28日	12月29日(使者来る)	3円(礼 金3円、外に鴨1羽)	田邊良顕
	「七月中画キ渡シ置絹地肖像画料」	12月30日	−	3円50銭(絹地共、画料)	山本讃七郎
	「○印下絵画料ノ内金トシテ」	12月31日	−	3円	香山秀吉
	「貸金ノ内へ請取」	12月25日	−	50銭	小川英雄
明治26年1月	「○印絹地コロム下絵」	1月7日(取掛り)	−	−	香山秀吉
	「前田正名君　菊板ボカシ砂目肖像	1月10日	−	−	泰錦堂
	「旧冬ノ下絵極リ　二ツ付ノ色版三面来ル」	1月12日	−	−	国分社
	「絹地肖像」	−	−	3円50銭	高瀬(「香山氏ゟノ高瀬注文」)
	「石版　軍盤」	−	−	8円	厚生〔盛〕堂
	「絹地肖像」	−	−	5円	高瀬
	「絹地肖像」	−	−	2円	山本(氏)
	「絹地肖像」	−	−	3円	井原(氏)
	「石版小形肖像」	−	−	1円50銭	国分社
	「石版小形肖像」	−	−	1円50銭	渡部(氏)
	「絹地肖像」	−	−	3円	三間(氏)
	「石版肖像」	−	−	3円	三間(氏)
明治26年2月	「表紙石版絵」	−	−	−	香山(氏)
	「さし絵石版画」	−	−	−	香山(氏)
	「小形石版肖像」	−	−	1円50銭	泰錦堂
	「鯖図三ツ」	−	−	5円	泰錦堂
	「絹地肖像」	−	−	3円50銭	水野(「小栗氏ゟノ水野注文」)
	「○印二人付石版」	−	−	4円	国分社
	「極小形五人付肖像」	−	−	2円	国分社
	「小形石版肖像」	−	−	−	泰錦堂
	「○印二人付半紙判」	−	−	6円	泰錦堂
	「極小形六人付肖像」	−	−	2円	国分社
	「全身絹地肖像」	−	−	5円	天野(「甲州天野」)

本表は、「文書 1」中の「摘要」「仕上日限」「金高」「注文主」の項目に限り、抽出・作成したものである。表中の「○」は原文のままとした。

表3 「文書2前半」

	書き込み	日付	金額	注文主
明治28年8月	「半身肖像　絹地着色　田中冨太郎氏写真通り」	8月15日	画料3円、絹地代50銭	香山(氏)
	「半身肖像　絹地着色　三人付写真ノ内ヨリ小児ヲ取ル　羽織八丈他見はからひひさ下タ迄画ク」	8月20日	画料2円50銭、絹代22銭	相川辰五郎
	「半身肖像　二枚　絹地織物用着色　老人男女向合イニ成ル様ニ画ク」	9月16日	画料6円、絹地代1円5銭	笹川(氏)
	「全身肖像　一枚　絹地着色　半身写真ヲ全身袴羽織ニ直ス」	8月6日	画料2円50銭、絹地代52銭	清水(氏)
	「全身肖像　一枚　石版画下絵　同石版画　前田正名君書生風ノ立像」	8月19日	画料3円50銭(うち下絵1円)	歌川(氏)
	「半身肖像　絹地着色　故三益社社長寺家村氏像　紋桐」	8月29日	画料3円、絹代52銭	三益社　森善吉(氏)
	「半身肖像画　絹地着色　老人」	9月7日	画料3円、絹代25銭	町田(氏)
	「全身肖像　絹地極彩色　前泉橋警察署長　丹羽氏大礼服立像」	8月16日	画料絹地共5円	香山(氏)
	「全身肖像　絹地着色　男子袴羽織ニテ可成手ノ出ヌ方宜シ」	9月7日	画料3円、絹地代50銭	神戸(氏)
	「写真銅版下絵　軍艦中ニテ月夜銀舞ノ図」	8月2日	画料3円	博文館
	「全身肖像　絹地画」	10月28日	画料3円50銭、絹地50銭	久保田松次郎 (「ちちみや事　久保田松次郎」)
	「石版双子　六色版料」「昨十七年八月中ノ滞り」「画料拾円ノ約定ナレども半額五円ニ引下ル」	8月31日	画料5円	鵜〔島〕田雪湖(氏)
明治28年9月	「鐘ヶ淵紡績所彫刻下図」	9月	画料3円	国分〔文(以下同)〕社　田中
	「両陛下御肖像石版画『此ノ版面ハ五月始メヨリ取掛リ八月下旬ニ出来上り」	9月中旬	画料8円	香山(氏)
明治28年10月	「故社長曲田成君石版　地色二度入り」「九月中旬ヨリ取掛り十月二日出来」「色版五日出来」	10月2日	画料30円	築地活版製造所
	「大形半身両陛下石版御肖像色版一色」「十月五日ヨリ取り掛リ廿一日出来」	10月21日	画料25円	香山秀吉(氏)
	「絹地肖像画女全身」	10月20日	画料3円、絹地代55銭	福井県本荘(氏)
	「陸軍少尉桂安雄氏肖像　絹地半身」	10月22日	画料1円、絹地代55銭	大絵(氏)
	「男全身絹地肖像」	10月24日	画料2円、絹地代23銭	尾張山本店
	「神田明神奉納物　大額ヒナ形図　壱面」	10月29日	画料2円	太田(氏)
	「半身絹地肖像画　一枚」	10月27日	(画料不明)	大絵(氏)
	「絹地肖像　全身」	10月29日	(画料不明)	清水店

本表は、「文書2（前半）」中の主要な書き込み、出来日、画料、注文主を抽出・作成したものである。

表4 「文書3」

	書き込み	金額	注文主	
明治33年1月	「女君のみ　二ツ画料」	3円		
	「扇子女下絵料」	3円		
	「扇子女石画料」	8円		
	「信用堂　風月堂　下絵」	1円50銭		
明治33年2月	「桜井ノ甚五郎下図」	3円		
	「風月堂ビスケット箱下図」	3円	風月堂	
	「信用堂ノ札帆ビール肩帳下図」	4円	信用〔陽(以下同)〕堂	
	「原田氏ノ朝鮮免状下図」	25円	風月堂	
	「敦賀山上ノ支那紙幣下図」	25円		
明治33年3月	「国文社吉木　帝商切取下図」	1円50銭	国文社(吉木)	
	「国文社武廣　ヤマ吉ノ手紙用紙下図　羊枚所」	2円	国文社(武廣)	
	「桜井の錦に小供下絵」	3円	桜井	
	「桜井羽子板女下絵」	3円	桜井	
	「国文社吉木　帝商切取り」	1円	国文社(吉木)	
	「平田　ヒポクラテス像石画」	3円50銭	平田	
	「国文社田中　勧業銀行図」	8円	国文社(田中)	
	「国文社　山陽堂看板下絵」	15円	国文社	
	「国文社武廣　スキ辺下図」	50円	国文社(武廣)	
明治33年4月	「小川氏　美人看判　石版画」	13円	小川氏	
	「桜井氏　美人色版料」	8円	桜井氏	
	「桜井氏　福助印帳紙　大」	3円	桜井氏	
	「同　小」	2円	桜井氏	
	「国文ヨリ引請　中村楼展覧会目録　千五百枚印刷ノ利得」	20円	国文社	
	「国文社吉木　三井銀行案内表紙」	2円50銭	国文社(吉木)	
	「小川　本表紙二面」	1円	小川氏	
	「栗山ヨリノ　コンミツシン」	15円	栗山	
	「東陽堂貫井ノ絹地全身肖像料」	6円	東陽堂(貫井)	
明治33年5月	「桜井氏注文　楠公銅像下絵」	2円50銭	桜井氏	
	「国文社武廣　綿羊下絵」	3円50銭	国文社(武廣)	
	「桜井　小児裸体石画」	8円	桜井	

本表は、「文書3」中の主要な書き込み、年月、画料、注文主を抽出・作成したものである。

資料1「文書2後半」

＊原則として旧字体は新字体に、カタカナはひらがなに改め、適宜句読点を加えた。解文中の〔〇〕は原文のままとした。判読できない文字は□とし、補足事項を〔　〕内に記した。

十月一日　入金　五円〔欄外〕
烟草　ルイスビル　包紙下絵石版共引請
画料拾円
注文主　五円請取　上原

日比谷大神宮祭礼　昼ヨリ晴
朝食前芝公園深間内へ行き、六月中応需認めたる寺院の図の画料の催促に行き、留主か未た起きざるか一向門を不開、無拠帰宅す。道にて鈴木貞太郎宅へ寄、絵の具を見せる。向の宮田へ行く。留主〔守〕（以下同）。下駄足駄を帰路に求む。信用〔陽〕（以下同）堂の桜井、高橋勝、上原来る。高橋夕景画筆を持つ。自分も無拠付き合いにルイスビルの下絵に付く。夕より廣瀬氏へ行き烟草を持参す。十時頃迄話し帰路、例の浮ん瀬屋にて一杯十一時帰る。留主へ小栗氏より釣りの笊を貰ふ。

二日　晴〔欄外〕
午前中は自宅にてルイスビル下絵を認む。正午より国文社へ出つ。社の仕事は山陽堂のヘーパ。
午后六時より松本楼にて自分并に小川邦孝、臼田慶二郎、三人の為めに送別会を催され会員三十人程則ち社員一同并に工場課長等なり。十二分の盛会にて酩酊の上、十時三十五分の気車にて品川の品川楼に登り、相手は欧文の中嶋丑之助なり。留主へ横田幸吉来り。菓子を貰ふ。

三日　晴〔欄外〕
午前六時十六分の気車にて帰る。金子政次郎宅へ寄り、明治生命の下絵を依頼す。其の足にて社へ出て、就業前にて下絵の参考を金子へ送る。
帰宅。湯に入り一杯を傾く。寝る。ねられず無拠、ルイスビルの石を取掛る。五時より出社。六時帰る。硯筆など求め、金子へ寄り、松茸など求め、九時帰宅す。留主へ金子の下絵来る。

四日　夕より曇〔欄外〕
早朝よりルイスビルの版にかかる。午後より社へ出る。桜井氏来る。上原来る。元版を石田へ持参しヲフセットをする。午後留主へ石持来る。此の日朝よりお吉、渡辺氏へ行く。土参〔産（以下同）〕は松茸にモナカ。十時過帰宅す。
社にて夜業、十時迄して帰る。

五日　雨〔欄外〕
早朝より勉強す。ルイス中々取写仕事にて思ふたより日間かかり夜九時迄通す。高橋勝蔵氏来り二時候仕事してかへる。

六日　朝より終日雨降〔欄外〕
早朝より勉強昼迄にルイス上る。二宮喜平来る。昼より出社。二宮宅へ寄る。会社の山陽堂へーパ上る。六時過日〔原文ママ〕より永田氏と松本にて飲む。其れより高砂へ行き、茸めしを食ふ。帰路金子へ行き、十一時帰宅。
国より手紙来り。兄上病気宜敷由。

七日　朝より雨止ず〔欄外〕
早朝湯へ行き吉本に逢ふ。武廣下宿へ寄る。朝よりの大雨にて家中くらく、取筆難有依而寝る。昼頃より嵐となる。幸にも東風にて表へは不当。夜高橋氏へ行き、同道にて深間内へ催促へ行、帰りに梅ば万にて一杯す。

八日　朝晴〔欄外〕
国文の茶の絵に取かかる。金川氏来る。上原、石を取りに来る。金子請取る。榊原今直しの服出来る。松茸を貰ふ。金五円榊原へ遣す。午后国文社へ行く。和田へ寄り、中西へ行き、金八円を払ふ。帰宅。高橋氏来り。松本へ行食事す。二宮へ寄る。

五円入〔欄外〕
烟草ルイスの石画料残金五円請取。

九日　快晴〔欄外〕
茶つみの絵砂目をかける。会社へ送る。九時会社へ出る。火災保けんの暦及び安〔案（以下同）〕内絵を十二円つつにて引請る。暦は金子氏へ任す。十二円にて尤も下絵とも安内は津田氏へ頼む。五円にて下絵料は二円半。此れは金子へ依頼の事十一時武廣と同車。保険会社へ行き其れより絵具見本を持ち渡辺桶町。玄々堂。渡辺忠久。青山豊三郎精行社。中嶋米吉。石版組合所にて川名。帰路金子政、津田等へ行き帰宅七時頃留主へ桜井来り又た上原来り。同書を進む不書。

十日　快晴〔欄外〕
早朝より茶の絵に従位す。桜井来る。扇子持女絵の額を同氏、求めると極る。夕、上原来り。下絵烟草を持ちかへる。福井表より書状来り。兄上大に快方にて自分にて礼状を認む。大に安心なり。夜国文社より石版来る。

十一日　快晴　入金四円〔欄外〕
早朝津田氏へ石を届ける。午後三時より国文社へ行き石の催促する。岡田氏へ行く、不在。栗山へ行き、本荘注文の銅版万□を買ふ。二円半。金子へ行き、保険会社下絵出来る。其れより金川、金子と三人にて松本に杯を取る。後ちに武廣、永田来り五人になる。十二時帰宅。留主へ川村甚之助氏来り、肖像画の礼四円持参。

十二日　昼頃より雨となる〔欄外〕
朝より国文社の茶の画に終日掛る。夕ゟ小栗氏にてイナの取れしより料理を頼まれて、大いに手きをを振ふ。大天狗なり。大に酩酊にて帰る。　此の日池上会式のなり。

十三日　快晴〔欄外〕
桜井氏の注文なる呉服張紙の絵を画き、三時頃金子氏来り。貸家の件にて中山邸へ行き、同道信用堂へ行、桜井にて下絵を渡し、其れより河村氏へ行、国文社へ行き、高木、天野、小林修の四人にて天文に呑む。其れより廣瀬氏へ行、十時頃帰宅す。築地の野上来り。暦の下絵を引請る。

十四日　晴　十〔字〕雲　入金五円女額とも二円半下絵料〔欄外〕
朝より国文社茶の石にかかる。桜井来り。額の代并に女の下絵料持参す。深間内来り、金の云訳け。上原来り又々烟草の張紙を頼まる。終日在宅。

十五日　曇此の日　午后より雨となる〔欄外〕
読売新聞八千号に至る。朝桜井来る。九時頃金子氏来り。井原叔父様見へ御辰なへ一件の返礼として鯛一尾と酒一瓶を貰ふ。金子と昼に其れを肴に呑み三時頃より丹のうかむせや宅に行き又、大に呑歌ふ。

十六日　昨夜より大雨　昼より快晴〔欄外〕
朝入湯に行き、信用堂の桜井へ置手紙をする。武廣来り、中将湯の木版彫刻を引請る。薗田へ書状を出す。此の日終日桜井の下図。

十七日　快晴〔欄外〕
少男は大神宮祭。榊原来。本荘氏服の件に付、大に儀倫〔議論（以下同）〕す。午后より会の方へ出つ。会場にて酩酊大に儀倫す。此の日宅にても小供の衣服の為めに小風波有りメて三度。

十八日　快晴〔欄外〕
早朝石附氏へ行、都新聞の岡本氏へ行き、岡田氏へ行き、国文社へ行き、本荘氏より各朝紙買求む。正午帰宅。此日午后彼是にて休業す。夜、薗田氏来り酒を出す。中将湯絵の積を為す。二枚にて二十五円の約。此の日榊原ゟ本荘服持参。金三円服料を送る。

十九日　晴〔欄外〕
福井大久保、松嶋両氏の肖像に取掛る。后後三時より外出。大成社へ立寄り肖像を引請る。国文へ行き、東陽堂へ行き馳走になる。

廿日　雨〔欄外〕
朝より二枚の肖像画にかかる。終日降止ず外出せず。

廿一日　晴〔欄外〕
朝より肖像画へかかる。中西世話にて中川粂三郎来り、本の表紙絵を頼まる。断りてかへす。本荘へ服并に銅版名刺など出す。午后高橋来る。食後運送す。伊藤小冬夜来る。

廿二日　晴〔欄外〕
朝より松嶋、大久保の肖像出来上る。午后ゟ清を連れて浅草へ行き、水谷観王の画を見て天勇にて一杯を催す。壱円二十銭の払、皆にて二円。後のみ留主へ桜井来る。

廿三日　曇　午后より降り
朝より桜井氏の下絵。尤も菖蒲は耕一氏認め、上の女のみ朝の中に画き上る。榊原、吉本、おまさ来る。切を貰ふ。上村の宅に昼ね。一寸武廣へ行き、留主にて帰て早くねる。

廿四日　快晴〔欄外〕
清運動会にて早くよりごたごたする。暦の下絵にかかる。甘〔余〕り行かず故に湯に昼行き、肖像の下絵にかかる。客一人もなし。夕方一杯を催し処、金子政より松本へ来れと申便来り、行く。大阪の織田来り居、大いに呑み芸者なち来る。帰りに浮瀬へ寄る。十二時過て帰宅す。

廿五日　快晴　入金拾五円〔欄外〕
福井より手紙来り。舎兄出院す。昨四日の由申来、大に嬉し。同ク本荘ゟ服を送りし礼を云ひ来る。榊原へも其の状をそへて云ひ送る。福井へも悦の状を出す。桜井来り、上原来り。
桜井より五円請取。上原烟草の版の代金を前金出し行く。

廿六日　快晴〔欄外〕
桜井の下絵に取掛る。昼食より日本橋榛原へ行き絹地三円余、敷ござ二枚三円、筆、栗山へ銅版の代二円五十銭を渡、河村へ各版下料五十銭を払ひ、細井氏へ絵の具を見せる。夕方こさ〔ござ〕来り敷く。

廿七日　快晴〔欄外〕
朝より築地の暦下絵にかかる。渡部氏より快気の鶏の子餅を貰う。
夜、大阪織田氏来る。

廿八日　曇り　此の日不降〔欄外〕
朝より桜井の下絵にかかる。昼出来上り渡す。田村氏絵の具を貰ひに来る。夕五時頃より河村氏へ客に呼る。大いに酩酊十時頃帰宅。手十巻には風月の栗饅頭大箱。

廿九日　電雷強く雨降る〔欄外〕
昨夜の大酔にて三度程嘔き大に苦む。終日頭不上、飯一粒を不通。柿四つと蜜甘二つにて止む。幸に此の日客なし。

卅日　快晴〔欄外〕
朝より大成社の肖像にかかる。あらまし出来る。近江や来り、小供の衣類八丈縞を買ふ。夕食後、歌川、金子、河村、廣瀬等へ行き、十時過き帰宅。

卅一日　快晴　大盛より五円　国文より二十六円。桜井氏より壱円五十銭。〔欄外〕
朝より大盛社の肖像にかかる。十時頃出来上がる。午後ごたごたにて終る。三時過より大成社へ行、肖像代、絹地代共五円八十銭請取る。国文社へ行き、四十八円請取る。金子へ寄り十七円渡す。ウカムセにて一杯。津田氏へ五円渡す。宅にて又た一杯。此の夜、一向不寝大に苦む。お吉へ二十円渡す。

十一月

一日　雨降り〔欄外〕
朝、頭大いに重し。是れ昨夜少も寝に不付故也。岡田氏へ行き、町田へ行き、薬を貰ふ。正午帰宅少しく仕事に付く一向不出来。上原、桜井、野上氏など来り終る。夜に入り二宮へ行、河村氏へ寄る。ビールの馳走になる。明八時箱根へ出立の約す。帰宅又一杯を呑み、十一時寝に付く。三時頃より不寝。此の日お吉丸やにて買物す。

二日　快晴〔欄外〕
朝、津田氏へ行き、上原の分を依頼す。八時三十分の気車にて河村氏と箱根へ行く約束にて十五分程前に宅を出て急き停車場へ行く。二分程有之、河村不見。彼是れ尋る内に発車にて口あんぐり。其れより十時十分にて河内津上り、尋ねても不見へ。馬車にて湯本へ行きても不見。所々聞合せても一向見し人なし。大に困り塔ノ沢洗心楼に一度上り其れより又ゟ湯本を尋ね、四時頃に成て宮ノ下奈らやへ使を出す。六時頃使手紙を以て帰る。大に喜び早々仕度にて二人引き車にて八時過き奈らやへ行、始めて会ふて安心す。大に呑み湯に入り伏す。此の日は心配沢山にて不面白。

三日　快晴　天長節〔欄外〕
朝三時頃目をさまし一人にて湯に入り、河村氏を起し、又た呑む。七時頃起て湯に入り、倉木賀なと運動す。九時頃宿へ帰り、そこ又た大に呑む。食事をなし十一時頃出立ぶらぶら二時頃塔の沢洗心楼に上り、湯に入り又た呑み出て運動す。土参物など求め三時頃出立。三時五十分の馬車にて湯本を発す。新橋へ上りしは夜の九時。其れより分れて帰宅す。此の日は大愉快なりし。昨日より帰宅迄に入費八円余。

四日　快晴　午后曇り〔欄外〕
朝、津田より石届き、車にて右田へ届け、午后御清を廣瀬へ頼む為連れ行く。帰りに河村氏へ立寄る。夜湯に入り一杯を呑む。仕事は築地の暦。一向図思ふ様に不付。

五日　快晴〔欄外〕
朝より築地之暦にかかる。桜井、上原来る。福井、井上より五十円の為替手形来る。田中鼎氏より母堂快気の祝来る。夜湯に入りて寝る。

六日　快晴〔欄外〕
朝、吉本氏へ行き、為替出金依頼す。帝商銀なればなり。午后三時より国文社へ行

き、永田らと松本楼に呑み十一時帰宅。
仕事は櫻井氏の張紙半身女。

七日　快晴〔欄外〕
早朝より桜井氏の下絵にかかる。午后四時金子来り連立て天文に呑む。

八日　快晴〔欄外〕
朝、福井本荘氏より為替金手形十五銀行にて三十円来る。但し二十五円は榊原の服代なり。仕事は上原の烟草、津田に画せの直し。午后国文社へ行き、六時帰宅。陛下御肖像下絵の夜業す。烟草の石は石田へ廻す。

九日　快晴〔欄外〕
朝、吉本へ行く。為替金三十円取替呉れる。築地の暦下絵にかかる。午后国元へ為替金二十八円出す。太丸やにて羽織を注文す。メレンス一丈とつむき半反を求む。井上へ送り品岡田氏来る。夜、書状を認む夜、杉本石を持参す。

十日　朝曇〔欄外〕
朝、築地の下絵にかかる。夕出来上る。秋田三五氏来り、茶器を貰ふ。御吉、榊原へ本荘の服代を持参す。

十一日　快晴　午后より雨〔欄外〕
早朝、杉本の下絵にかかる。十時頃出来、午後国文社築地へ行、上野へ行く心得の処雨も殊になりし故に帰宅す。

十二日　曇り　終日雨なし〔欄外〕
朝より出て、鎌倉かし〔河岸〕猶興社へ寄り、榊原へ寄、上野へ行き、美術院の展覧会を見、白馬会展会を見、パノラマを見、美術協会展覧会を見、橋本雅邦氏画の展覧会を見、四時頃山下にて壱杯をやり食事をなし、松田氏へ絵の包を見せ、東陽堂へ立寄、八時過ぎ阪村氏へ寄り、酒をよばれ、十一時頃帰宅。留主へ、丹、金子、深間内、園田来る。木版持参す。

十三日　快晴　少々有風　五円入り〔欄外〕
朝湯へ行き、武廣へ寄り、木版を渡す。深間内来り、種々言訳の後ち十五円の画を五円にまけてやる。午后三時過テ金子倶楽部の事にて来る。同道にて栗山、香山、田村、歌川へ寄り、田村、金子、歌川の四人にて松本へ行、帰、ウカムセへ行き十一時頃帰宅。杉本の絵、半日程する。

十四日　快晴〔欄外〕
朝より杉本の絵にかかる。終日人も不来、夜業す。九時迄。

十五日　曇　寒し〔欄外〕
早朝より松本の絵にかかる。客なし。夜八時半迄夜業、出来上る。井上四方太今礼書来り。鮭ぶり二尾を送りし由申来り。

十六日　快晴〔欄外〕
朝、深間内の下坂、同氏の手紙持ちて来る。但し職工に入り方の件食後二宮へ行き、国文社に行、金川不在にて松崎へ下坂の事頼みかつ又信用堂へ寄り、桜井にあふ。信用堂より枠の下絵を頼まる。十時過き福井表の三枚絹絵にかかる。午后一時過き福井井上より大なる鮭ふり二尾来り、ふりを其まま井原へ御吉持参す。榊へも鮭少々と秋田老人へつくなえを送る。

十七日　快晴　風寒し　三円入り〔欄外〕
絹地のりんかくに取りかかる。十一時頃より湯に行き町田にて診察を乞ふ。国文社へ行き下坂を頼み帰宅。信用堂の蠶種の看判〔板（以下同）〕下絵にかかる。桜井三円持画料持参。八時迄夜業看判出来上る。

十八日　快晴　拾壱円入る〔欄外〕
朝、信用堂に行、二の宮へ金二円、深間内へ催足〔促〕に行き、呉れし礼を送る。夕杉本来り、拾壱円画を持参す。御吉廣瀬へ小鯛二尾持参す。薗田夜来り、版出来る。

十九日　快晴〔欄外〕
吉本氏の絹地へ大黒を画く。松下に居る。神代清氏初て来り、種々話し為午後は何もせず。朝武廣へ中将湯の版を届ける。此の日、田中氏の宝丹下絵にかかる。

廿日　快晴〔欄外〕
朝より宝丹の下絵にかかる。朝、三間へ竹山死去に付悔に行く。金子へ寄る。同人病気にてねて居る。おけ紙して又た製本会社の小川の処へ行、午迄話す。午后は宝丹の下絵、夕より国文社へ行、金川、武廣は松本へ行き、藤太来り、大に杯を上げ十一時頃うかむせにてかれひを食し十二時帰宅。

廿一日　快晴〔欄外〕
朝より宝丹の下絵にかかる。大に気分悪く、午后半日ねる。四時より夜業にかかる。八時過迄やる。

廿二日　快晴〔欄外〕
朝より宝丹下絵にかかる。二時過き出来上る。同く田中氏の鴻の池の表紙下絵にかかる。夜八時頃画き上る。夜、金子氏へ行、同氏羽田へ行き留主。病気宜敷由。歌川へ寄り帰宅。

廿三日　快晴〔欄外〕
朝より信用堂の東京ビール張紙の下絵にかかる。十時より国文社へ行く。昼帰宅。信用堂のビールにかかる。夜八時迄夜業、ビール上る。桜井来り、神代来る。

廿四日　快晴〔欄外〕
朝より桜井の下絵にかかる。午后栗山今呼に来る。行く。関口氏へ行く。同氏留主。五時迄待ち帰らず。無拠帰宅す。夜、勝山氏来り、洋服看判の相談にて帰る。

廿五日　快晴〔欄外〕
朝、桜井の下絵にかかる。夕方出来上る。夕、桜井来る。夕、勝山繁太郎氏へ行、版画の事を話し、電話にて上妻へ明夕五時に行く事を約す。夜、信用堂より株券下絵を依頼し来る。九時迄夜業す。昼吉本、帝商の大阪支店の図を認め呉れと云ひ来る。

廿六日　曇〔欄外〕
朝より寒し。吉本の帝商図にかかる。昼より上妻の関口氏へ行く。留主にて小泉のらと見に行き、四時頃より気分あしき故に一人にて松本へ行呑て、帰りに湯へ入り、十時頃帰宅す。

廿七日　晴〔欄外〕
朝八時より牛込の小泉へ行き、十時頃帰宅。吉本の帝商の図を認む。九時迄夜業す。桜井氏り石田暦を認めてくれとて来、断る。

廿八日　快晴　無風〔欄外〕
朝、吉本へ帝商下絵届ける。大黒転写紙へ写す。昼食後、国文へ行く。田中氏の宝丹の看判に付、彼是れ時間取四時頃帰宅。信用堂の株券下絵にかかる。

廿九日　快晴〔欄外〕
朝より大成社の肖像にかかる。朝大に気分あしく仕事いやなり。昼食後、湯に入り大に気分直る。又た大成社のにかかる。お清廣瀬帰りをそく五時頃迄帰らす心配。向へに行きしに国文社にて一時間半も待せ火ともし頃帰る。夜業せす。

卅日　快晴　午後少々風　図画三十二円
八円　二円五十銭　五円八十銭　大成社〔欄外〕
朝より肖像にかかる。三時頃出来る。勝山の手代来り、桜井来る。三時より出る。築地活版所にて八円、国文社にて五拾七円を請取る。内二十五円は薗田の彫刻料。五時過ぐ永田と松本へ行き九時帰宅。桜井の下絵料二円五十銭入り。

十二月
一日　曇〔欄外〕
朝曇り。湯に行き、田中の宝丹下絵直しにかかる。桜井来り、絹絵四枚注文、此れにて当月の収入の占に付大に安心す。十一時頃より小栗外門一件に付大にほんそう、終日比れにて終わる。夜、金子、薗田来る。

二日　快晴〔欄外〕
田中の出来る。吉本の大黒石版にかかる。昼上る。午後大盛社へ絵を渡し、国文社へ行、岡田氏へ行き、金子へ寄り、羽田へ行堂の株券下にかかる。福井本荘ゟ三十円の為替来り、武廣へ依頼して請取。

三日　快晴
六円半　本荘ゟ〔欄外〕
信用堂の株券にかかる。勝山氏来り洋服の看判を引請る。小栗の一件にて、時々日間取りには閉口。夜九時過迄夜業す。武廣より為替金請取る。

四日　曇〔欄外〕
朝より信用堂の株券にかかる。桜井、田村、森田来る。夜、河村、中西、榛原、紙や高橋金太郎へ行き、中野の衣類出し来る。十時頃帰宅。

五日　快晴　十円〔欄外〕
朝、信用堂株券、昼に上る。昼持参す。画料請取る。株券七円、カイロビール壱円半つつ則ち十円請取。小栗の一件にてごたごた外門を松本に連れ行、種々等問ふ。九時帰宅。

六日　快晴〔欄外〕
朝より、勝山の洋服看判にかかる。田中氏来、宝丹の看判極る。四時頃より石附国文社へ行き、六時過帰宅。十時迄夜業す。

七日　雨天〔欄外〕
朝より宝丹のから版を認め、夕方石附へ持参、夜は桜井の三枚の絹絵下絵にかかる。

八日　朝曇〔欄外〕
朝より三枚の下絵、田村来る。夜八時迄夕ゟ雨降る。

九日　快晴　拾円入〔欄外〕
朝より三枚の下絵、勝山来り、金拾円請取。夜勝山石来る。夕ゟ小栗へよばれ大に酩酊。十時頃帰宅。

十日　快晴〔欄外〕
四枚の絹絵にかかる。石附より石面来る。夕ゟ小栗へ行、下山氏居られ話し帰る。九時。

十一日　風強く〔欄外〕
朝より絹地にかかる。十一時頃より余り風強き為め二階を休む。朝、石を磨く。丹氏来り、夕開業の印に一杯を催すとて来る。夕より出かけ十一時帰宅。壱円祝持参。海福、榊原来る。

十二日　晴〔欄外〕
快晴。絹地、小栗の為めこたこた。

十三日　晴〔欄外〕
朝より絹地、当日は大清潔方にて大そうなごたごた。小栗の為、夜業を休し外門を新橋へ送る。十時過ぎ帰宅。

十四日　晴　五円〔欄外〕
朝、絹絵、小栗より酒と金五円、礼に貰ふ。風邪の気味にてこまる。岡村、石附氏来る。夕ゟ松下氏へ行、地走になる。

十五日　晴　風〔欄外〕
絹絵、昼出来上る。風邪気味にて町田氏へ行き薬を貰ふ。国文社へ寄る。夜業十時。

十六日　晴〔欄外〕
朝より宝丹石画、田中来る。夜業十時。齋藤よりかにを貰ふ。

十七日　晴〔欄外〕
宝丹石画、勝山ゟ使来る。昼より絵の具の約定の事に付、車にて両国、中嶋其の外へ行、二時帰宅。夜業九時迄。

十八日　雨　午后雪となる〔欄外〕
朝より絹絵。桜井来る。夜九時頃、隣家足立にてふや（〇〇）をやらかし大さわぎ、其れが為、夜業中止にし、松下へ行、十二時迄祝酒をかわす。

十九日　快晴
二十円入〔欄外〕
朝、岡田太丸やへ行き、うかむせやに寄りヒール〔ビール〕を知〔馳〕走になる。桜井来り、金を請取。本荘よりかねを貰ふ。夜、河村、田村、勝山へ行き、八時過ぎ帰宅。松下来り、十二時迄呑む。

廿日　晴　大に寒〔欄外〕
朝より絹地絵大に勉強する。福井ゟ手紙来り。小供ばひふ〔原文ママ〕に掛り、併し命を取り留めし様子。

廿一日　雨寒〔欄外〕
朝より絹地画、夕出来る。

廿二日〔欄外〕
勝山の洋服看判画にかかる。夜十一時。

廿三日〔欄外〕
同夜十一時。

廿四日〔欄外〕
同夕出来上る。卒族会館内の山村へ持参。帰りにうかむせやに呑む。松下氏へ行く。かるた。

廿五日〔欄外〕
宝丹、色版三面上がる。夕、山本来、春画を持参す。吉本に見せる。夜十一時過迄。

廿六日　曇　二十八円〔欄外〕
勝山、色版、信用堂より桜井氏の二十八円持参。夜湯に入る八時よりねる〔鉛筆〕。

廿七日　快晴〔欄外〕
朝より勝山色版、宝丹色版にて終る。九時より休む。

廿八日　快晴　風〔欄外〕
朝より勝山色版壱面、宝丹色版上る。昼、国文社へ行、石附へ行く。

廿九日〔欄外〕
〔空欄〕

卅日　四十円　拾円〔欄外〕
桜井氏のヘーハを画。国文社へ行、画料四十円、勝山にて拾円請取。金子、丹と三人松本へ行。石附より拾円を貰ふ。

卅一日　拾円〔欄外〕
〔空欄〕

［注］

（1）岩切信一郎「三間印刷所抄録―慶雲堂三間七兵衛と三間印刷所三間隆次について」『一寸』第二号、書痴同人、二〇〇〇年五月、三－七頁。

（2）中谷哲二「『日本大観京都巻』所収三間印刷所の広告」『天理参考館報』第二二号、天理大学附属天理参考館、二〇〇九年十月、六三－八八頁。

（3）藤田麻希「大正期美術印刷の権威三間印刷所に関する報告」『Bandaly』第一〇号、明治学院大学大学院文学研究科芸術学専攻、二〇一一年三月、一六一－一八六頁。

（4）田島奈都子『明治・大正・昭和初期 日本ポスター史大図鑑』国書刊行会、二〇一九年八月。

（5）田島奈都子『戦前期日本のポスター 広告宣伝と美術の間で揺れた五〇年』吉川弘文館、二〇二三年四月。

（6）田島奈都子「戦前期日本のポスター製作における写真との関係―その存在と影響を中心にして」『非文字資料研究』第二八号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、二〇二四年三月、一－三五頁。

（7）田島奈都子『百花繚乱の美人画ポスター』芸術新聞社、二〇二四年三月。同書は「美人画ポスター」を「豪華な衣装や装身具を身に着けた、女性を主題とするポスターに対する総称」と定義する。金洲が石版額絵の流行した一八七〇年代から石版印刷に親しみ、一八九〇年代の石版額絵の人気凋落を経てポスター製作に転身した点を指摘し、金洲が原画を描き三間印刷所で印刷した《三越呉服店 元禄模様宣伝時代》（一九〇五年）の作品仕様が、美人を主題とした日本製ポスターの標準型となったこと等も指摘する。

（8）『美人のつくりかた―石版から始まる広告ポスター』印刷博物館、二〇〇七年四月。

（9）島屋政一『日本版画変遷史』大阪出版社、一九三九年十月。

（10）小野忠重『版画―近代日本の自画像―』岩波新書（青版）四一一、岩波書店、一九六一年三月。
小野忠重『リトグラフのあけぼの―明治の石版画』岩崎美術社、一九七八年四月。

（11）『「版画・80年の軌跡」展図録（第一部）』町田市立国際版画美術館、一九九六年四月。

（12）青木茂監修・町田市立国際版画美術館編輯『近代日本版画の諸相』中央公論美術出版、一九九八年十二月。
（13）『描かれた明治ニッポン〜石版画（リトグラフ）の時代』描かれた明治ニッポン展実行委員会・毎日新聞社、二〇〇二年八月。
（14）森登「印刷局と工部美術学校の狭間で」『印刷と美術のあいだ―キヨッソーネとフォンタネージと明治の日本』印刷博物館、二〇一四年十月、六四－七五頁。
（15）『記録する眼―豊穣の時代 明治の画家 亀井至一、竹二郎兄弟をめぐる人々』郡山市立美術館編、二〇二二年十一月。
（16）『福井の明治美術』福井県立美術館、一九九七年三月。
（17）本論では金洲遺族の各家が保管する資料を、仮に「金洲資料」と呼ぶ。「個人所蔵」は金洲資料を指す。
（18）金洲の他界に接し、息子の波々伯部方次は、金洲の絶筆となった《楊柳観世音尊像》を原色版グラビア印刷で縮小複製し、金洲の親友で大社尋常高等小学校校長や大社村村会議員を務めた堀江健太郎がその事績を記した。
（19）前掲注9、七五七－七五九頁。
（20）本論では「波々伯部」を遺族の読み方に倣い「ほおかべ」とする。石版画のサインには「ははかべ」としたものや、ふりがなを「ほうかべ」や「ははきべ」とした文献も見られる。
（21）『読売新聞』朝刊、一八八二年一月一〇日。
（22）藏田愛子「小石川植物園の画工・渡部鍬太郎の足跡―明治二十年代の植物学と図版制作」『近代画説』第二四号、明治美術学会、二〇一五年、九八－一一五頁。
（23）金子一夫『近代日本美術教育の研究―明治時代』中央公論美術出版、一九九九年。
（24）青山立也（編輯兼出版人）『石版技手人名鏡』一八八五年一月。相撲の番付表の形式で、印刷、石版器械並薬品インキ販売先、彫刻師、画工、精写、精書に従事した石版印刷関係の会社名と個人名が載っている。
（25）『秋季展覧会出品目録』明治美術会、一八八九年十一月。
（26）三輪英夫「「小宴紀念」画帖について」『近代画説』第一号、明治美術学会、一九九二年十一月、九六－一一六頁。
（27）『日本美術年鑑 明治四四年 第壹巻』画報社、一九一二年十一月。
（28）日本図案会は一九〇一年（明治三四）に福地復一や渡部鍬太郎らを中心に、意匠図案の発達を図る目的で創立された。同会

の会報『日本図案会報』（第一号、一九〇七年十一月）には、基本会員の一人に波々伯部捨四郎の名前がみえる。

（29）波々伯部方次（一八九八～一九七八）は一九一八年（大正七）に東京美術学校製版科を卒業。朝日新聞社のグラビア科（のち凹版課、出版印刷部）にて『アサヒグラフ』や『関東大震災画報』のグラビア印刷に携わった。一九三〇年（昭和五）七月にグラビア製版の研究「グラヴュア版面一部改変に関する発明」で朝日新聞社より表彰された。一九五三年（昭和二八）に朝日新聞大阪本社の印刷技術研究室長兼出版印刷部長を退職、一九五三、五四年に印刷局嘱託。

波々伯部方次「大震災画報に活躍」『朝日新聞グラビア小史―出版印刷部40年の記録』朝日新聞社、一九六二年九月、二二四－二二五頁。

（30）松尾篤三編『曲田成君略伝』一八九五年十月。

（31）「桐原捨三君小伝」一八九〇年五月八日、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵（請求記号一三－〇四）。

「閑人帖《石版美人》」『毎日新聞』夕刊、一九八六年八月二五日。

（32）吉田漱『浮世絵の基礎知識』雄山閣、一九八七年七月。

（33）『松平家史料展示室企画展 維新の肖像』展示解説シート一四八、福井市立郷土歴史博物館、二〇二二年。

（34）福田源三郎編『越前人物志』一九一〇年。

『大集合！幕末福井の偉人たち』福井市立郷土歴史博物館、二〇一八年。

『松平家史料展示室企画展 あなたの知らない中根雪江』展示解説シート一一三、福井市立郷土歴史博物館、二〇一八年。

（35）前掲注15、郡山市立美術館。

（36）前掲注12、山口順子「明治前期の新聞雑誌における視覚的要素について」二一三－二四七頁。

（37）木村小舟『少年文学史 明治篇 上巻』（童話春秋社、一九四二年七月）。

（38）前掲注12、青木茂「「刷り絵」から「版画」へ」三－二九頁。

（39）前掲注1。

（40）前掲注32。同書の「銅版・石版印刷発行元」によると、竹中国勝が営んだ国文社は一八七九年（明治一二）に梅村翠山の彫刻

会社を併合、石版部に多胡実敏や横田金五郎らがおり、明治期の代表的な石版発行元とされる。昭和期に廃業した。

（41）本論では、金洲資料の文書に記される「信用堂」を「信陽堂」の当て字と判断した。信陽堂は、工部美術学校に学んだ石版画家・岡村政子のであった夫・岡村竹四郎が一八八二年（明治一五）に創業した。のち一九〇六年（明治三九）に信陽堂は、堀健吉が営む写真石版業の猶興社他と合併、東洋印刷株式会社が設立された。
山室次郎『岡村政子伝』一九六二年。

（42）「印度王族の日月会臨場」『美術新報』第二巻第十八号、一九〇三年十一月二十日。

（43）『日本美術院百年史 第二巻上 図版編』日本美術院、一九九〇年十二月。
『日本美術』四六、一九〇二年十一月。

（44）「家庭」を画題にした金洲の他の作品に『日露戦争実記 戦争文学』（七月之巻、育英舎、一九〇四年七月）の口絵に載る波々伯部金洲画《軍人の家庭》をあげることができる。ここでは男性（父親）の半身像を描いた肖像額を背景に、女性（母親）が水兵服を着た小児を腕に抱きかかえて立つ姿が表されている。

（45）『美術画報』一六編巻六、画報社、一九〇四年十二月。
『日月之光』第四、画報社、一九〇五年四月。

（46）『聖路易博覧会出品日本美術（The Illustrated Catalogue of Japanese Fine art Exhibits in the art Palace at the Louisiana Purchase Exposition, St. Louis, Mo. U. S. A.）』一九〇四年、東京文化財研究所にて閲覧。

（47）東轉子評「聖博出品漫評（絵画之部）」『図按』第二三号、大日本図案協会雑誌、一九〇四年一月、二九－三一頁。

（48）『美術画報』十八編巻四、画報社、一九〇五年十一月。
『美術画報』十九編巻三、画報社、一九〇六年五月。

（49）『歴史風俗画集』巻一、画報社、一九〇六年九月。

（50）金井紫雲『動物と芸術』芸艸堂、一九三二年。

（51）「侍女」『帝国画報』第三年第一号、一九〇七年一月。図版解説に「廂髪に、式部袴当世風の流行もさるものながら、文金高髷、打太古帯、御殿女中の風姿はまた何となく奥ゆかしく、優に気高きものなりかし、図は波々伯部氏の傑作にして、狆のざれ

かりたる処、配合の妙一際趣を増せり。」とある。その他、一九一一年の『みつこしタイムス』九（一二）にも金洲筆「狆図」が掲載されており、金洲が繰り返し狆をモチーフにした様子が窺える。

（52）山口真理子「石井鼎湖の生涯と画業」『石版画の開拓者 石井鼎湖 知られざる明治美術』城西国際大学水田美術館、二〇一〇年十月、二五－三〇頁。

（53）村瀬可奈「明治の浮世絵にみる「江戸」の絵画化―楊洲周延を中心に―」『町田市立国際版画美術館紀要』第二六号、町田市立国際版画美術館、二〇二三年三月、三－二一頁。

（54）前掲注3、7、8。

（55）『みつこしタイムス』三越呉服店、一九一一年三月、二〇－二一頁。

『三越』第一巻第二号、三越、一九一一年四月。

［挿図出典］※挿図はすべて禁転載

図1　波々伯部金洲／ポスター用原画／制作年不詳／紙本着色／七五〇×五二〇㎜／個人所蔵

図2　波々伯部金洲写真／個人所蔵

図3　青山立也「石版技手人名鏡」／一八八五年／一枚刷／二八三×二二六㎜／国文学研究資料館所蔵

図4　明治美術会通常会員証（表・裏）／一〇〇×六〇㎜／個人所蔵

図5　「伯爵伊藤博文君肖像」／明治美術会通常会員画帖『小宴紀念』／三一九×二四二㎜／岐阜県美術館所蔵

図6　「文書1」『注文受簿』／個人所蔵

図7　「文書2前半」『〔受注記録・日記〕』／個人所蔵

図8　波々伯部繁「六月 梅雨の曲」『当世十二ヶ月』／一八九二年／一三八×二一四㎜／国立国会図書館所蔵

図9　波々伯部繁《中根雪江漁夫像》／一八九〇年／絹本着色／越葵文庫所蔵（福井市立郷土歴史博物館保管）

図10　中根雪江肖像写真／一八六九年／福井市立郷土歴史博物館所蔵

図11　波々伯部繁「貴衆両院正副議長肖像」／『読売新聞』第四八四一号附録、一八九〇年十二月七日／四〇〇×二九〇㎜／東京大

学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵（請求記号三二－二四）

図12　波々伯部繁「美人・才芸優等者」／『改進新聞』第三一四八号附録、一八九三年八月一日／四七〇×三二〇㎜／東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵（請求記号八九－〇三）

図13　波々伯部捨四郎「月下剣舞の図」／『少年世界』第一巻第十六号、一八九五年、国立国会図書館所蔵

図14　「文書2後半」『〔受注記録・日記〕』／個人所蔵

図15　「文書3」『〔受注記録〕』／個人所蔵

図16　波々伯部繁／石版下絵／二〇〇×三三〇㎜／紙に墨／個人所蔵

図17　波々伯部捨四郎《眞の和楽》／『日本美術院百年史』二巻上、東京文化財研究所、一九九〇年、七六六頁

図18　波々伯部金洲《美人》／『美術画報』一六編巻六、一九〇四年、国立国会図書館所蔵

図19　波々伯部金洲《淑女》／『美術画報』一八編巻四、一九〇五年、国立国会図書館所蔵

図20　波々伯部金洲／下図／七九五×五六〇㎜／紙に着色／個人所蔵

図21　波々伯部金洲《おこしょう》／写真／一二三×一三五㎜／個人所蔵

図22　波々伯部金洲《当世美人》／絵葉書／一四三×九〇㎜／個人所蔵

図23　写真／個人所蔵

図24　波々伯部金洲／大日本麦酒株式会社ポスター／函館市中央図書館所蔵

図25　波々伯部金洲／下絵／二七一×三八五㎜／絹本着色／個人所蔵

［謝辞］

本論の執筆に際し、波々伯部金洲のご遺族である波々伯部家、植松家、川合家の皆様より格別のご理解とご協力を賜りました。とくに川合康夫氏より、金洲に関する作品や文献等の情報をご提供頂きましたことに深く感謝申し上げます。受注記録や日記の解読にあたっては、東京大学経済学部資料室の冨善一敏氏にご指導頂くとともに、田中恒雄氏、川合氏より多くのご助言、ご協力を

頂戴しました。また、早稲田大学の増野恵子氏、福井市立郷土歴史博物館の藤原千穂氏より貴重なご助言を頂きました。資料閲覧や画像掲載にあたっては、国文学研究資料館、越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館、岐阜県美術館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫の各機関にご協力を賜りました。皆様に心より御礼申し上げます。

本論は、ＤＮＰ文化振興財団「二〇二五年度グラフィック文化に関する学術研究助成」（「石版画家・波々伯部金洲に関する調査研究」）の成果の一部です。

（人文学研究科助教）

SUMMARY

Artistic Career of Hōkabe Kinshū:
Lithography and Related Fields in the Late Meiji Period

Aiko Kurata

This paper examines the activities of Hōkabe Kinshū (1862–1930), who made lithograph posters from the late Meiji to the Taishō period.

Hōkabe was born in 1862 in the Fukui domain. He first studied Western-style paintings and lithographs under Miyamoto Sanpei and later made his own lithographs and paintings. From the late 1890s to the early 1920s, he became the exclusive artist for Mitsuma Printing, known for its exquisite multicolor lithograph prints. There, he designed original posters for Mitsukoshi Kimono Store and Great Japan Beer Co., Ltd. Kinshū left behind a trove of portraits, posters, original paintings, photo albums, sketchbooks, documents, and postcards, all of which are highly valuable for understanding the production process of lithographs, posters, and portraits in modern Japan.

This paper introduces materials owned by Kinshū's family and analyzes documents such as order records and diaries maintained by him. I use these materials to analyze the exchanges Kinshū made with lithograph printing companies from the late 1880s to the early 1890s and the trends behind his works. This paper also explores Kinshū's career during the 1880s, when he earned his living through contract work with lithography companies. Meanwhile, from the late 1890s, Kinshū transitioned into designing Japanese-style paintings that leveraged the realistic portrait techniques he had mastered through lithography, which brought him newfound fame as a poster artist specializing in beauty paintings.